

人権作文発表

「命について思うこと」

三田西陵高等学校2年 仲由梨佳



▲発表中の仲由梨佳さん

災害や事故に巻き込まれ、命を落とした人をニューズで知るたび、私は「人の命って何なんだろう」と、最近よく考えます。高校生になり、いろいろな体験をするようになったからかもしれませんが、そう感じています。おそらく身近にいる家族や近所の人の死を経験したからだと思います。

小学校二年生のときに、クラスメートの一人が事故によってお母さんを亡くし、その後、家庭の事情により引越してしまいました。私は彼のお母さんと知り合っていたので本当に驚き、信じられませんでした。一学年二十一人という人数が少ない学校だったので、大切なクラスメートの一人と離れてしまうことには幼かった当時の自分に虚無感を与えたのを今でも覚えています。

中学校の三年の冬、高校入試の三日前に母が他界しました。母は癌を患っていました。癌が再発して生きるのがともしんどかったでしょうが、精神的に強い人だったので、あまり人には自分が弱っている所を見せませんでした。責任感が人一倍強く、元気で明るい性格でした。だから、多くの人から頼られていました。我慢強く、一度決心したら大抵のことはやっていたのけました。病気とも一生懸命闘っていました。そんな母は私の憧れであり、ひとりの人間としてとても尊敬していました。亡くなる一週間くらい前にもう長くは生きられないと思ったのか、それまで入院していた病院を出て家に帰って来ました。亡くなる三日前くらいになるとお腹に水が溜まり風船のように膨れ上がって話すこともままならなくなり、遂には寝たきりの状態になりました。刻々と母の命の終わりが迫って来ているのだと私はうすうす感じていました。母の表情はいかにも苦しそうで、もう私に笑いかけたり、怒ったりしませんでした。「たたいま」と言っても、返ってこない母の「おかえり」の声を思い浮かべながら帰宅しました。あまりに痛々しい姿を目の当たりにして何もできず、自分の部屋にこもっていました。予感的中し、あんなに苦しそ

うだった表情がやわらかくなり、母は最後に私たちに微笑みを残していつてしまいました。病気が唯一無二の存在を奪い、私をどん底に突き落としました。自分の中で最も受け入れたくないものを突然手渡されて、どうすることもできない現実が苦しむばかりでした。誰かがテレビで、「大切な人が死ぬと心にぽっかり穴が空く」と言っていたのを聞いたことがありません。母が亡くなってしばらくは本当に心に穴が空いたようでした。今まで続いていた日常がどこかなく変わってしまった。違和感のある日々を過ごしていかれたので、周囲の友だちは母を亡くした私になんて声をかければよいのかよく分からなかったと思います。私も実際に逆の立場になると、どう励ましたらいいのか深く考え過ぎて結果的に何も言えずに終わってしまう気がします。けれども、クラスの友達に「だいじょうぶ？」とか「困った事があったらいつでも言ってみて」と心配してくれました。母の知り合いの方々が、私の知らない生前の母について教えてくださいました。そして、母が家に帰って来たのは私と姉と少しでも一緒にいたかったからなのだという話を聞きました。周りの人たちのそんな優しい言葉や思いやりが私を少しずつ癒してくれました。

高校に入學してから出会った友達にも、沢山元氣をもらいました。私の事情を知らなくても、学校生活を一緒に過ごすことで次第に仲良くなり、一緒に勉強したり、部活で練習に打ち込んでいくうちにさびしいと感じることが少なくなっていく、心が何か温かいものに満たされていきました。周りの人たちに支えられて私の心の穴は少しずつ埋められていきました。

人は必ず死んでいきます。そして身近な人の死は周囲の人の環境を大きく変えます。その変化してしまつた環境に馴染むようになるにはもの凄く長い時間がかかります。もしかすると、馴染む日などないのかもしれない。残された者の悲しみを完全に消すことは絶対出来ません。けれどその傷を少しずつ癒していくことはできるかもしれません。それは人との出会いによつてです。亡くなった大切な人は二度と戻ってこないけれど、大切だと心から思える人と出会うことはできると思います。自分を支えてくれる、また支えてあげたいと思う特別な人に出会い、何かで一生懸命に打ち込むことで人間は強くなっていくのでしよう。私はどんなに辛い目に遭つても、その度に絶対乗り越えていきます。母のように目の前にある一つ一つのことに正面から向き合つてこれからも前進していきたいです。

わたし No. 144 出会う気づくつながる

「わかっていない」ではつなげられない

藤田久美さん 三輪小学校教職員

友だちのカミングアウト

私が中学二年生の時である。道徳の授業で在日韓国朝鮮人差別について学習した。その時に私は「差別は絶対にあかん。悪いこと。正しいのは人を大切にするんだとわかっている。わかっているのに、どうして勉強をするんだろう」と内心、冷めた気持ちで受けていた。

ある時、席替えをした。隣の席は、あまり話をしたことがない子だった。私は、「どんな子かわからないから様子を見よう」と心の中で距離をおくことにした。何も知らない彼は私に屈託なく話しかけてきた。その無遠慮な物言いに最初は腹を立てていた私だが、だんだん言葉のキャッチボールが楽しくなってきた。私たちは話が弾むようになった。

そんなある日、その彼ともう一人、二人の友だちが教室の前に立った。担任の先生の「二人からとても大事な話があります」という言葉から緊張感が伝わってきた。

「ぼくたちは在日韓国朝鮮人です」「この□□という名前は日本名で、本名は〇〇と言います」今までの道徳や歴史の授業で聞いたことが、目の前の友だちのことなのだと思えた。続けて「急に〇〇と呼んでと言つても、みんなも言いくいかもしいから、慣れるまでは今まで通り□□と呼んでもいいです」と聞いて、私は心の中で叫んだ。「そんな本名で呼ばなあかん！」

理想と現実

この時、道徳の授業は実は身近なことであり、だからこそしっかりと学習する必要があるのだと自覚した。二人は自分のルーツをクラスメイトにカミングアウトしたのだ。皆が受け止めてくれると信じて。その重みは中学二年生なりに私にもわかった。「まづ彼らを本名で呼ぼう。それが在日韓国朝鮮人としての彼らの人格を認め、尊重し、エールを送ることになる」という担任の先生の言葉に、私はその通りだと思つた。彼らの信頼に応えたいと強く思つた。

しかし、隣の席である間だけ話すぐらいの彼に、私が改まって名前を呼ぶ機会はなかった。用事もないのでわざとらしく呼ぶのは嫌だなと思つていて、予期せぬ時にチャンスは来た。が、口慣れない名前を呼ぶのが急に気恥ずかしくなり、思わず今までの

名前を呼んでしまった。後で「慣れるまでは日本名を呼んでもいいと言つていたよね」と自分に言い訳をした。

結局、私は彼を一度も本名で呼べなかった。クラス替えで接点がなくなり、その後の細かいことは覚えていない。ただ自分の不甲斐なさを後悔した記憶だけは残っている。あの道徳の授業では「わかっている」と思っていた。しかし頭でわかっているでもそれを行動にしなければ、それはわかっているに過ぎないのだ。

「わかっていない」、だから「わかって」と努力する大切さ。時が過ぎ、教職に就いている今、これまでのたくさんの出会いや学びの中で、私は人を大切にすることは人となることがなると気づかされた。中学二年生の時の彼を本名で呼べなかった後悔がきっかけとなり、何でも安易に「わかっている」とは思わないようにして、より深いつながりが持てるように心がけている。人との関わりの中で、「わかっている」と言うのと、そのあとの相手の言葉をシャットアウトしてしまう。だから〇か×ではなく、△を作るようにしている。

もし私が今、あのころの中学二年生に戻ることができたならば…。道徳の授業では「自分はどう考えているけど、みんなはどうだろう」と友だちの意見に耳を傾ける。本名を呼ぶ機会を逃した後、彼に「私は本名で呼ぼう」と決めていたのにさつきは言えなかった。悔しいわ」と話しかけたりする。そうすればもつとつながることができただろう。

百人の人がいれば百通りの感じ方、考え方、生き方がある。正しい答えはいつも一つとは限らない。目の前で笑っている子が実は昨日の悲しい気持ちを持ち越えようとして心の中では奮闘しているのかもしれない。友だちに対して怒っている子が本当は仲良くになりたいという表現の裏返しなのかもしれない。表面だけを見て「わかっている」と思つていてもそれは本当にはわかっていない。だからこそ目の前の相手を本心に「わかりたい」「わかろう」とする努力が必要だ。日々の生活の中で対話を重ねること、相手の思いに寄り添い、想像すること、そして、共に学び続けることが共感や共生につながっていくのだと信じて、これからもより深いつながりを大事にしていきたい。